

飲水思源

自動車販売のリーダー

24

□ 菊池武三郎伝

豊田喜一郎の社長退陣でストは急ぎよ解決した。トヨタ自工の後任社長には、豊田自動織機の石田退三社長が選ばれた。

争議解決後のトヨタ自動車再建の第一の関門は、トヨタ自動車販売(自販)の業務開始だった。自販設立はストとは別に、トヨタ再建案の骨子により昭和25年4月に設立登記を済ませていた。しかし、自工から自販に人員を移管して業務を開始する直前にストが

始まり、自販は発足したまま中に浮いてしまっていた。このためスト終結後の最初の仕事は、自販の業務を軌道に乗せることだった。自販は25年6月から活動を開始。取締役社長には神谷正太郎が就いた。

自販の構想が販売店サイドに示されたのは、25年1月の販売店協会役員会だった。席上、新会社の社長就任が予定されていた神谷から説明があった。「これからの自動車

トヨタ自販の創立

販売は月賦制度を確立しなければならぬ。そのため販売部門を独立し、月賦販売会社を作る。新会社はトヨタ自動車再建の方策であるとともに、将来の自動車販売を軌道に乗せるものだ。理想的な会社とするために販売店の協力をお願いした「い」というものだった。自販が業務を開始して間もない6月23日、神谷社長は自動車月賦制度の本場だったアメリカの実情視察に出発した。視察中のロサンゼルスで、神谷は朝鮮動乱の報を耳にする。この朝鮮動乱が、デフレにあえぐ日本の経済界に特需をもたらし、社はその後の生産体制を確立し、乗用車生産の基礎を固めることができた。トヨタは特需の高利潤で累積赤字を一挙に解消し、大きな黒字に転換。利益は工場の近代化の設備投資に振り向けられることとなった。

再建への「第一関門」

しかし、こ

その後の高度成長のきつかけを作ることになった。朝鮮動乱で生じた特需は日本の産業界全般を潤したが、最高の受注を受けたのが自動車業界だった。その大部分がトヨタ、日産に集中。両



昭和25年ごろの豊田喜一郎(左端)と菊池武三郎(右端)

(文中敬称略)

11つづく